

Title	宇尾野久君を憶う
Sub Title	Dr. Hisashi Uono : a memoir
Author	高村, 象平
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1969
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.62, No.10/11 (1969. 11) ,p.1055(1)- 1056(2)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	宇尾野久教授追悼特集号
Genre	Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19691101-0001">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19691101-0001</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 宇尾野久君を憶う

高村 象平

宇尾野久君が急逝したと聞いたとき、驚かない人は一人だっていなかったに相違ない。留学先のミュンヘンで、こまかなしかし重要な研究課題を前にして、ああでもない、こうでもないと苦勞していることとばかり思っていたからである。

塾内のいろいろな都合もあって、久君の留学はやや年齢をとりすぎている感なしとしなかった。しかし当人の意気大いにあがっているのに冷水をかけることもないし、わが国内研究事情だけでなく、かの地の現状にも親しく触れてくるならば、着想なりその発表形式には多かれすくなかれ変化が生ずるに相違ない。その実現を、実のところ、私たちは久君の留学の成果として期待していたのであった。

いま私の手許には昨年5月9日附の久君の手紙がある。一年間の滞在許可を得た報告であるが、それに続いて「ここ（ミュンヘン）では経済史研究所に一部屋を与えられて、リュトゲ教授は旅行に出られましたので、ツォルン教授の演習やボスル教授のドクトル試験受験者の討論には、紹介なしで出かけて出席許可を得てきました。いまは図書館でモヌメンタ・ボイカその他の資料を読んだり、外人のためのドイツ語学校に通って授業をうけていますが、何かまた学生に戻ったような感じがします。演習や討論で、教授が学生をこなごなにどなりつけているような感じで何一つ容赦しない厳しさには嘔然としています。（下略）」

久君はかなり前からフリートリヒ・リュトゲ教授と文通していた。ときには難問題の解答を求めることもあったようである。「どうもはっきりした返事をしてくれない」と、研究室でつぶやいているのを耳にしたこともある。これには久君の質問要旨がリュトゲ教授に納得できないこともあったらしいが、それには一向気がつかないのが久君らしいところであった。とにかくリュトゲ教授には傾倒していて、一時は教授をわが国に招こうと企てたことすらあった。それも個人でやるというのであって、それを聞いた先輩の一人に「君はそんなに経済的に余裕があるのか」とひやかされたら、内々私にもらしたことを憶い出す。この企てはリュトゲ教授自身の都合もあってお流れになったが、久君には思いつめると矢も楯もたまらなくなる気質があるようであった。ある心理学者が宇尾野君の生れた新潟県人の性格として述べているところに、弱気であるか勝気であるとし、また同県人の特性に、規則正しさ、淡白、消極的、親切、誠実、ねばり強さ、とっつきにくい、堅実、陰

気を列挙しているが、この大部分がある点までは久君の言動にあてはまるように思われるのである。

県人の共通性格をとりあげて、故人の姿をあれこれとあげつらうのは礼を失する所業ともいえよう。ことに身近かの方々にとっては決して快よいものではない。ただここに私がそれを敢えて企てるのは、故人がこのいわゆる県民性の良い面を平常の行動を通じて私たちに示していたことを、永く記憶にとどめたいからであって、他意はない。

久君の性格は決して勝気ではなかった。私の眼からすれば、弱気の好人物であった。久君が学位請求論文を提出する前後の態度は、いまから顧りみてもおのずと微笑をさそうものであった。当初その意図を察し得なかった私は、久君は一体この頃どうしたのかと、内心いぶかったものである。亡き野村博士から「まとまっているなら提出してごらん」といわれたようであるが、その後、久君の晴々した表情をみて、人間はこうも変わるものかと感じたことであつた。それだけ正直な人物だったのである。

久君の学位論文は既に入稿され書評もあることだから、ここにはとりあげない。ただ審査の衝に当って痛感したことは、久君の文体が心の内面そのままの表現であつて、いわゆる余所行でないということであつた。この点まことに好ましい。しかし他方において、意表外の行文にぶつかつて、これをどのようにうけとめるべきかと戸惑うことがすくなくなつた。物事に頓着しない久君の性格の現われである。が、それは表面のことであつて、内面は極めて敏感な人であつた。それを内奥に秘めて、研究課題に向つてねばり強く堅実に進む研究生活を、久君は自身の平常心としたのであつた。

20年も前のことである。戦後4、5年経つたとき、私たち経済学部の手連中は関東近県下に資料探訪のため何回か出張した。終日あちこちと不案内の場所を歩きまわり、初対面の旧家所蔵の古文書を借用する許可を得るまでには随分緊張もし苦勞もしたが、その際の一晩のことである。夕食後雑談にふけていた私たちは、久君の姿が一座の間から消えて相当時間がたつていることに気付いた。「もう部屋に戻つて寝ているのではないか」、「そとへ散歩にでも出かけたのではないか」などと話したあと、では入浴して寝ようかということになつて、風呂場に行つてみて驚いた。浴室の流し場に腰かけたままぐっすり寝こんでいるではないか。「おい宇尾野君、どうした」と声をかけても返事もない。よほど昼間の仕事がかたえたのか、汗を流したあと快よいままに寝入つてしまつたと、ケロリとして話したと、あとで聞いたことであるが、いまでも私たちの間では、久君の湯殿の居眠りという現実ばなれの行動を口にしてニヤニヤする。久君のお通夜の席上でも故人の逸話としてこれが話題になつた。

このようなユーモアを身をもって示す人物、中世初期ヨーロッパの真摯な研究者は、ミュンヘンの宿舎で誰にも看とられることもなく逝つた。気の毒とも何ともいふべき言葉を知らない。だが久君の温かみのある性格は、天上の世界でも好感をもつて迎えられるに相違ないと、私たちは信じているのである。

## 植民地ニュー・イングランドの一タウンについて

— サフィールド (マサチューセツ) の場合 —

中 村 勝 己

アメリカ植民地時代の土地制度は次の3つの類型に分ける事が出来る。即ち不自由(白人・黒奴)労働に依存するステーブル staple 生産体制としてのプランテーション、ペンシルヴェイニアの私領主制やニュー・ヨークの「パトルーン patroon制」・「マナー manor 制」、そして独立自営農民を中心とするニュー・イングランドの「タウン・システム town-system」がそれである。まず、南部ではプランテーションを造出する為に必要な大量の土地は人頭権制 headright system と売却制を通じて獲得され、不自由労働力はイギリスから供与された信用によって購入された。独立後棉作に移行したプランテーション制下の南部においては、たとえ「資本主義」的企業らしいものが見られ、その生産過程の一部に白人熟練工が雇用されていたとしても、労働力の主要部分は奴隷およびプランテーション制の所産たる「貧困白人」であつた。それ故に南部工業の機械設備や経営組織がどれほど近代的に見えても、それらはプランテーション体制の拡張又は補完物にすぎず、その基礎にある奴隷労働を自ら破棄する事は出来なかつたと考えられる。中部は色々な意味で南部と北部の中間的形態と考えられる。オランダ西印度会社に由来するパトルーン的地主制やイギリス時代のマナー制の問題は興味深いが、これらのハドソン河流域の半封建的地主制は、西部農産物の競争と農民の反地代闘争とによって解体して行つた。北部は産業資本の播種地であるが、産業資本形成の前提としての独立自営農民層を広汎に創出したのは、はかならぬ「タウン・システム」だったのである。このように「タウン・システム」こそ、ニュー・イングランドを特徴づけ、アメリカ資本主義の歴史的起点をなしたものである。

「タウン・システム」については、19世紀末葉以来今日迄かの地においていくつかの研究結果の発表を見ているし、各タウンの地方史的研究や関係史料が少なからず刊行されている。殊にマサチューセツはコネティカットと並んで、タウン史研究の中心を形成している。わが国においても戦前には市村与市氏の先駆的研究「ピューリタン植民史の研究」にはじまり、藤原守胤「アメリカ建